

ナゴヤ子ども応援会議

平成27年 5月24日 午後 1時55分

名古屋市科学館サイエンスホール

議題

議題① 会議運営について

議題② 名古屋市教育振興基本計画の重点施策について

議題③ 市長の定める教育に関する大綱について

出席者

河村 たかし 市長

服部 はつ代 委員長

梶田 知 委員

福谷 朋子 委員

小栗 成男 委員

野田 敦敬 委員

下田 一幸 教育長

〈河村市長〉

はい、それでは、始めたいと思います。

まず、ようけの方にお越しいただきまして、ありがとうございます。ようお越しくださいました。

それではナゴヤ子ども応援会議を開催いたします。

最初に『議題① 会議運営について』でございます。本件は、事務局を代表しまして下田教育長よりご説明をお願いいたします。

〈下田教育長〉

この会議は先ほどからもご紹介がありましたように、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正に基づいて生まれた会議でございます、そういう意味では、今日生まれたてで、会議のルールがありませんので、まず会議のルールを定めるということでございます。

お手元に資料がございます。

概要といたしましては、まず名称を「ナゴヤ子ども応援会議」とする。これは、市長の子どもを応援するという強い意思がございますので、そのことを端的に表した名前にしようというものでございます。

それから、会議の構成員は、法律どおり市長と教育委員会に、会議については個人情報保護の必要がある場合を除きまして原則として公開をすると、それから会議の結果、合意に至った事項については、お互いに、市長と子ども教育委員会がその結果を尊重する、そういう内容にしたいと思います。

以上でございます。

〈市長〉

はい、それでは、ただいまの説明及びお手元配布資料（案）ですけど、このように定めるということによろしいでしょうか。

〈各委員〉

（うなずく・異議なし）

〈市長〉

いいですか、はい。すみません、一応、市長と教育委員の会議でございますので、それが公開されとる、ということでございますので、傍聴のみなさんで採決をとるといふものとはちょっと違いますので、すみませんが、このメンバーで決めさせていただきます。

それでは、議題①については、議題了承とさせていただきます。

続いて『議題② 名古屋市教育振興基本計画の重点施策について』でございます。これは、教育委員会からの議題ということでございまして、服部委員長さんから、ご説明をお願いします。

〈服部委員長〉

座って失礼いたします。委員長の服部でございます。

それでは、まず、名古屋市教育振興基本計画の概要について、ご説明申し上げます。

〈矢野MC〉

すみません、バックモニターを使いますので、市長は背中になりますので、どうぞ席を用意しておりますので、

〈市長〉

ああ、そうですか。

〈矢野MC〉

そちらの方でご覧になりながらよろしいでしょうか。失礼します。ごらんいただきながら。服部委員長、お願いします。

〈服部委員長〉

名古屋市教育振興基本計画は、本市の教育の進むべき方向性とその充実に資する取り組みの推進のために策定をいたしました。

また、この計画は、本市の目指す街づくり実現のため、平成26年10月に策定した「名古屋市総合計画2018」とも整合性を図り、本市の総合計画の中の教育分野に関する個別計画としても位置づけております。

名古屋市教育振興基本計画は、「夢に向かって人生をきり拓くなごやっ子の育成」を基本理念といたしております。

計画推進にあたりましては、

◇社会全体で子どもを育む「家庭・学校・地域の環」の視点

◇子どもの個々の状況と成長段階に応じた途切れることのない支援を行うとともに、生涯を通じた学びへの接続と学んだ成果が生きる好循環を実現する「学びの連続性」の視点

◇子どもたちの一人ひとり異なる個性を尊重しつつ、そのよさや可能性を見つけ、引き出し、伸ばす「子どもの応援」の視点

この3つの視点を重視しております。

そして、4つの重要な課題を設定しております。

①社会を生き抜く力を備えた子どもたちの育成、②多様な社会的ニーズに対応できる教育環境の充実、③子どもの豊かな育ちの応援、④生涯を通じた学びへの接続、でございます。

本計画の策定に当たりましては、市民の皆様のご理解を図り、幅広く意見をお聞きするために、様々な検討、意見聴取を実施してまいりました。

教育委員会の会議におきましては、平成25年度からおよそ1年6ヶ月の期間をかけて話し合いを行ったほか、職員からの意見聴取や、平成26年10月、11月に延べ5回行いました児童生徒との意見交換会、同年11月の教育シンポジウムの開催、12月に延べ6回行いました有識者・教育関係者との意見交換会など、子どもたちや市民の皆様のご意見を始め、およそ650件のご意見をお聞かせいただきながら策定を進めてまいりました。

本計画では、5つの基本計画を定め、さらにその実現を図る19の施策により具体的かつ体系的な方策を定めて取組むことといたしております。

本日は、この19の施策の中から、特に教育委員会として取組んでいる重点施策について、各委員よりご説明させていただきます。

説明は以上でございます。

続いて、本計画における主な重点施策につきまして、スライドをご覧くださいまして、そして各委員から、意見を述べさせていただきたいと思っております。

まずは、「なごや子ども応援委員会」についてでございます。

それでは、スライドをご覧ください。

〈ナレーション〉

「なごや子ども応援委員会」についてご説明します。

「なごや子ども応援委員会」とは、子どもたちが抱える、いじめや不登校、児童虐待など様々な問題に対応するため、専門的な知識や能力を持った職員を学校現場に常勤職員として配置し、子どもたちを応援するチームです。

このことにより、普段の学校生活を通じて専門家として教員と協力しあい、子どもたちの問題の早期発見、未然防止や個別支援を行い、他の機関とも連携した学校のサポート体制づくりを支援するなど、問題の解決に当たる、日本初の試みであり、ここ名古屋のオンリーワン施策です。

「なごや子ども応援委員会」は、臨床心理士など児童心理の専門家であるスクールカウンセラー、社会福祉士など児童福祉に長けたスクールソーシャルワーカー、地域との連絡調整役であるスクールアドバイザーからなる常勤の3職種と、警察官OBであるスクールポリスを合わせた計4職種の専門的知識・経験を持ったスタッフで構成されています。

平成26年度、この4職種4人を1チームとして、市内11ブロックの中学校に設置、合計44人体制で、設置校を中心にブロック内の小中学校の子どもたちの悩みの解決など、支援活動を行ってきました。

一方で、現在のチームのスタッフだけでは、全ての学校の子どもたちの支援には、まだ、応えきれていない現状があります。

そのため、今年平成27年度には、さらに、スクールカウンセラーを各ブロック1人増員するなど、スタッフを14人増員した合計58人体制に拡充、今後も更なる拡充を図り、子どもたちの支援に取り組んでいきます。

〈服部委員長〉

今年は「なごや子ども応援委員会」が2年目を迎えるわけですがけれども、さらに子どもや学校、保護者へのよりよいサポートをしていきたいと思っております。

「なごや子ども応援委員会」は、学校の先生と同じ視点ではなくて、学校の先生と違った視点で、学校の問題とか子どもたちの問題を見るっていう外部性ですね、そういうものを大事にするとともに、見ていただいたように4職種があるんですけれども、その人達のメンバーがそれぞれに高い専門性を持っています。

そして、相談にいらした人に対しては、法に触れたり、人に危害を加えたり、それから器物破壊するというような社会のルールを外れたこと以外は、秘密を守る、そして安心・安全を大事にしながら、一人一人の子どもを大切にどの子

も自分の持てる能力を最大限に発揮できるようにサポートしていきたいと思っておりますし、この4人の職種がチームを組み一丸となって子どもたちをサポートできたらいいなという風に思っております。

また、より良いサポートをしていくためには、やはりチームの一人ひとりの方のメンバーの「力量」がとても大事になってまいります。

学校の先生や、それから現在全中学校や全高校にスクールカウンセラーが入っておりますし、小学校のうち131校の中にスクールカウンセラーさんが入っておりますけれども、そういうところとも上手に有機的に連携をしながらやっていくことが大切と思っております。そして「なごや子ども応援委員会」のメンバーの増員、増やしていくということに対しては、急激に増やすというよりは、着実に、将来的には全中学校に応援委員会のスクールカウンセラーを配置できるように目指してまいりたいと思っております。

では、続きまして、梶田委員から、ご説明させていただきます。

〈梶田委員〉

梶田でございます。よろしくお願ひいたします。私からは「歴史の里の整備」についてでございます。

それでは、スライドをお願いいたします。

〈ナレーション〉

「歴史の里の整備」についてご説明します。

名古屋市の史跡、志段味古墳群をご存知でしょうか。

志段味古墳群は、名古屋市の北東、守山区上志段味の地に残る史跡で、4世紀から7世紀ごろまでの古墳時代に築かれた約70基の古墳が残ります。

志段味古墳群の特徴は、前方後円墳、帆立貝式古墳、円墳、方墳などバラエティ豊かな古墳が、山頂、山麓など様々な地形を活かして、古墳時代の全時期を通じて築かれていることなどです。これらの古墳群が歩いて周れる範囲に集中して築かれていることから「日本の古墳時代の縮図」とも評価されています。その学術的価値が認められ、昨年10月に、国の史跡、いわゆる重要文化財として指定されました。

本日ご紹介する「歴史の里」とは、この貴重な史跡、志段味古墳群を保存活用し、日本の古墳の調査研究の拠点とするとともに、楽しみながら歴史が学べる名古屋の観光拠点、「古墳・歴史のテーマパーク」として整備する事業です。

現在、教育委員会では、平成30年度のフルオープンに向けて、ガイダンス施設の建設を予定しています。

「歴史の里」は、本物の古墳の発掘調査が体験できる日本初の施設であり、古墳に関する最新の調査研究が行われている施設です。そして、最新の調査研究の成果が分かりやすく発信、展示される現在進行形、i n g形の施設を目指します。

それにより、お客様が何度遊びにいらしても新たな発見がある観光名所、全国から修学旅行や社会見学に来ていただける学習施設とし、名古屋の賑わいを作り出す「古墳・歴史のテーマパーク」として整備していきたいと考えています。

〈梶田委員〉

はい、ナレーションにもありましたように、お客様に何度でも遊びに来ていただける施設とするためにも、私なりの意見を述べさせていただきたいと思います。

まず一点目はこの古墳群の西のエリアと東のエリアのちょうど真ん中に東谷山フルーツパークがあります。この歴史の里と東谷山フルーツパークの良さを生かしつつ、よりお客様にとって魅力のある施設となるよう一体的に運営してはいかがでしょうか。

二点目は、この歴史の里の古墳群の中でも、志段味古墳は大正12年に京都帝国大学において発掘調査されました。豊富な副葬品が出土されたことから、5世紀後半の代表的な古墳として全国的に知られていますが、その出土品は現在京都大学に所有されていると聞いています。何年かに一度でもそれを展示公開する機会をつくってはいかがでしょうか。この歴史の里が一時的にではなくて、名古屋市内外から長く多くの方々に何度でも来ていただける施設となるよう市長さんの応援をよろしく願いいたします。

以上でございます。

〈服部委員長〉

続いて、福谷委員から、ご説明させていただきます。よろしくお願ひします。

〈福谷委員〉

委員の福谷です。よろしくお願ひします。私からは「子ども・若者の総合的な応援拠点の整備」についてご説明させていただきます。

それでは、スライドをご覧ください。

〈ナレーション〉

「子ども・若者の総合的な応援拠点の整備」について、ご説明します。

これは、多様な専門家の能力を生かし、子ども・若者の育ちを応援するもので、いわば、名古屋のオンリーワン施策「なごや子ども応援委員会」が目指す理念を、さらに全市的に展開しようとするものです。

さて、現代の子どもは、いじめや不登校、発達障害、貧困など、多様な悩みを抱えています。

名古屋市でも、目的や年齢など対象に応じた複数の相談施設を設置し、悩みを抱える子どもや保護者の支援をしていますが、これまでのやり方では、一人ひとりの子どもへの切れ目のない支援ができていないという課題があります。

そこで、この課題の解決策として、これらの相談施設を集約化し、0歳から青年期までのすべての子ども・若者を対象とした、総合的な応援拠点を整備します。

新しい「子ども・若者の総合的な応援拠点」は、次の2つの視点から子どもを支援します。

1つ目の視点は、子どもへの切れ目のない支援です。現状では、相談施設は、支援する対象や年齢に応じ、個別に設置されています。

これを1か所に集約することで、悩みを抱える子どもや保護者が、迷うことなく、「ここへ行けば相談できる。」と分かるようにします。また、個々の相談に当たる専門家どうしの連携も格段にスムーズになり、切れ目なく子どもの支援ができるようになります。

2つ目の視点は、教育と福祉が連携した支援です。教育現場と相談施設との間で情報の共有を図りながら、教育的な視点に加えて、生活困窮世帯や単身世帯への支援など、福祉的な視点も加え、いかなる環境にある子ども・若者も、一人としてもらすことのない支援を行っていきます。

この2つの視点から「子ども・若者の総合的な応援拠点」を整備し、悩みを抱えた子どもや若者を応援する、万全の体制を構築してまいります。

〈福谷委員〉

これまで、行政の縦割りによるサービスの中で、悩みを抱えていても、「どこに相談に行けばいいのか分からない」という理由で相談に行けなかったり、あるいは、思い切って相談に行ったところ、縦割りの中で、これはうちで扱っている問題ではないので向こうに行ってください、という形で別の相談場所を紹介されたりして困った経験をお持ちの方もいらっしゃるのではないかと思います。

また、お子さんが学校を卒業してしまったあとで、今までの相談機関を利用したいと行ってみたら、相談を受けるのは難しいという風に言われて、途方にくれた親御さんもいらっしゃるかもしれません。

名古屋市教育委員会としては、今後、そのような方を出さないために、「ここへ行けば大丈夫。」という、いわば駆け込み寺のような相談施設を作りたいと思っております。そのような施設の存在は、私も含めてですけれども、名古屋市民にとっても心強い存在になるのではないかと思います。

また縦割りではなく、福祉と教育の壁を取り払う形で関係機関が連携するという点も非常に重要と考えております。多様な悩みを抱える子どもたちに対して、ワンストップサービスが提供できる施設を実現することは、私自身、子どもを持つ保護者の立場としても、ぜひ推進していかなければならないものと考えています。

〈服部委員長〉

続きまして、小栗委員、お願いいたします。

〈小栗委員〉

はい、私からは「グローバル人材育成教育の推進」ということについて、河村市長が、「日本一が良い。」とか「世界一じゃないといかん。」という風にいつもおっしゃっておられますので、そういう視点からも少しご紹介をさせていただきたいという風に思います。どうぞよろしく願いいたします。

〈ナレーション〉

「グローバル人材育成教育の推進」についてご説明します。

教育委員会では、国際社会の中で活躍する児童生徒の育成のため、「グローバル人材育成教育の推進」に取り組んでまいります。

グローバル人材とは、単に語学力にとどまらず、コミュニケーション能力や、主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性、責任感、そして、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティを備えた人材を指します。

また、幅広い教養と深い専門性、チームワークとリーダーシップを有した人材を育てていくことが必要です。

グローバル人材の裾野を広げるため、名古屋市立学校では、英語活動アシスタントの派遣など英語によるコミュニケーション能力の育成と異文化理解の推進を図ってきました。

さらに、名古屋市立高校においては、それぞれの学校において、生徒・保護者のニーズに対応したグローバル教育を推進しています。

特に、市立向陽高等学校では、今年、愛知県初の理数系専門学科である国際科学科を開設、「世界に貢献できる理数系人材の育成」を掲げ、英語で理科の授業などを行う科学英語学習や海外でのプレゼンテーションを実践する海外研修等グローバル教育に力を入れています。

このような取り組みが認められ、本年度文部科学省からスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けました。

向陽高校の卒業生であり、ノーベル物理学賞を受賞された益川先生のような世界で活躍する人材の輩出を目指していきます。

また、現在、グローバル人材育成のための拠点施設の設置を検討しています。同拠点施設では、小中一貫の指導カリキュラムの作成など、調査研究拠点とし

での機能、留学や海外交流の支援、海外の提携学校の開拓など、交流サポート拠点としての機能に加え、英会話サロンや語学ラボなど、学習サポート拠点としての機能を備えた施設を整備してまいります。

〈小栗委員〉

はい、今ご覧いただきました通りなのですが、いよいよ、名古屋市教育委員会、すごいことが始まるぞ、ということでございます。

グローバルという風にキーワードがありましたんですが、実は名古屋市教育委員会の「名古屋」というキーワードを取りますと、皆さんご存知でしょうか。名古屋に名古屋大学があるんですが、ノーベル賞に関係された方、6人も実は名古屋から関係者、お見えになります。これたぶん世界トップクラスなんじゃないかなという風に思っております。

ノーベル賞受賞の益川先生も向陽高校、先ほどSSH、スーパーサイエンスハイスクールと言いましたが、国際科学学科が新設され、これも世の中が今、理系ブームになってきている中での大変タイミングの良い設置ではないかなという風に思っております。

合わせて、名古屋でいうと、愛知県でみてみますと、世界トップの自動車メーカーがあります。こういった技術なんかを、どんどんどんどん世界の、特に高校生とか中学生にアピールをしていきたいなという風に思っております。

先日、シンガポールに視察に行かせていただきました。先ほど、英語を勉強するということがありましたが、英語を勉強しながら、さらにアジアの中でも進んでいるなという風に、研究施設その他を見て回りまして思いました。もっともっと日本、そしてこの名古屋を活性化していくためには、ぜひ河村市長にたくさん予算をいただかないといけないなということで、河村市長、ぜひお願いしたいという風に思っています。

そういった意味で、これから世界に向けてどんどん子どもみなさんが成長されるように努力してまいりたいという風に思っております。

以上でございます。

〈服部委員長〉

続きまして、野田委員から、ご説明いたします。よろしくお願いいたします。

〈野田委員〉

委員の野田でございます。よろしくお願いいたします。私からは「学力向上プラン」について説明させていただきます。

それでは、スライドをご覧ください。

〈ナレーション〉

「学力向上プラン」について、ご説明いたします。

教育委員会では、子どもたちの個に応じたきめ細やかな指導により、基礎基本を着実に身に付けさせるとともに幅広い学力を伸ばすため、様々な取り組みを行っています。

本日は、これらの取り組みのうち、2点を取り上げ、ご説明いたします。

1点目は、「3分間スピーチ力の向上」です。

教育委員会では、実生活で生きて働くことばの力の育成を目的とする「ことばの力育成事業」の一環として、「3分間スピーチ力の向上」に取り組んでいます。3分間スピーチとは、原稿を読むだけのスピーチではなく、自信をもって、相手の反応を見て、説得力のあるスピーチをする力を、子どもたちに身に付けてもらい、思考・判断・表現することにつながる言語活動の充実を図ります。

これまでも、各学校において、スピーチ実践を国語学習の場や朝の会など日常活動の場、各教科等の学習発表の場などで取り組んでいましたが、一層のスピーチ力育成のため、平成27年度から、モデル実践校において、アメリカのパブリックスピーキングを学ぶ団体の協力を得るなどアメリカの指導メソッドの導入、より効果的な指導の充実をはかり、成果を名古屋市各校に普及していきます。

話すテーマについて、伝えたいことを明確にし、構成や話す順序など効果的な伝え方を考え、相手に向かって堂々と自信を持って話す、というスピーチ力を高め、実生活で生きてはたらく総合的なことばの力を育成します。

学力向上プランのための取り組みの2点目として、「情報通信機器を活用したICT教育の充実」について説明いたします。

教育委員会では、学習におけるICTの効果的な活用について授業実践を通して明らかにするため、平成25年度から2年間にわたり、タブレットパソコンなどのICTをモデル校に導入し、効果の研究を進めて参りました。

それでは、このモデル校で行われたタブレットパソコンや電子黒板等のICTを活用した授業の様子をご覧ください。

～授業の様子（動画）～

いかがでしょうか。子どもたち一人一人が学ぶ意欲を持ち、じっくり考え、生き生きと学習に取り組んでいる様子がおわかりいただけたと思います。

このようにICTを適切に活用すれば、子どもにとってより分かりやすく効果的な授業、子どもが自ら主体的に学べる授業ができる、授業がかわる効果、一人一人が繰り返し確認しながら、課題をとことん追究し、学ぶ意欲を高めることができる、子どもが伸びる効果、2つの効果が生まれることが分かってきました。

教育委員会では、モデル校での成果を、名古屋の全ての子どもたちに活かせるよう、各教室へのタブレットパソコンや電子黒板の導入などICT機器の増大やコンテンツの充実など、ICT環境の整備を図っていきたいと考えています。

また、あわせてICT機器を子どもたちの学びに役立てていくICT活用授業力の向上とそのための教員研修の充実など教師力の充実を図ります。国や他の政令市に先駆けた「ICT子ども応援都市NAGOYA」、その実現により子どもたちが自ら考え、自ら学ぶ、アクティブラーニングを実現してまいります。

〈野田委員〉

はい、市長さんこれ、施策1の中の重点取り組みの学力向上の集中的・総合的な推進、5つあるんですけれども、そのうち、2つを説明差し上げました。

1つ目は、市長さんもいつも言われているように、原稿なしで3分間くらい堂々としゃべれないかんということに関することをございますけれども、もちろん話す、聞くとかそういった基本的なことは大前提だと思いますけれども、そういう話す、聞くという力にプラスしてですね、伝えたいことがないと自信を持って話せないということなんで。

伝えたいこととは、何かというと、授業もそうですし授業以外のこともいいですけれども、心に響いたことや感動、直接体験の中で、直接体験というのは自然体験でもあったり社会体験でもあったり色々あるんですけども、そういうものを子どもたちに体験をさせないと本当に伝えたいことになってこないと思います。ですので、そういった、教育環境の整備も、話す、聞くの基本的な能力にプラスして重要になるんじゃないかと。そんな援助をお願いしたいなと思います。それが一点です。

それから、ICTの件ですけど、これも名古屋市教育振興基本計画を作るときにですね、我々先ほど紹介がありましたように、いくつかの学校を見回しまして、子どもに聞きました。ある小学校に行ったときにですね、これ今日の冊子の99ページにありますけれども、子どもたちがテレビのニュースで見まして、ある先進校ではタブレットパソコンを使ってやっている、僕たちもあーやって勉強したいんだという声を聞いてまいりました。

で、いま残念ながら名古屋では、そういったタブレットパソコンを使ったのは本当に少数、小学校では1つと聞いておりますけれども、なかなかお金のかかることをございます。それで、この計画の最終年度の30年までにですね、75パーセントを整備したいという風に目標をもっておりますけれども、先ほど最後にありましたICT子ども応援都市ナゴヤを目指すには、75パーセントではちょっと…。大変お金のかかることをございますけど、ぜひ全ての子どもたちがこのタブレットパソコンを使って、意欲的に学習ができる、そんなことを実現していきたいと思いますので、ぜひともよろしく願いいたします。

以上です。

〈服部委員長〉

では最後になりましたけれども、下田教育長のほうから、ご説明させていた

だきます。よろしく申し上げます。

〈下田教育長〉

教育長の下田でございます。私のほうからは「学校トイレさわやか改修」をお願いしたいと思います。

ビデオをご覧ください。

〈ナレーション〉

まず、『学校トイレさわやか改修』についてご説明します。

建設以降、大規模な改修工事が行われずに老朽化した学校トイレを、明るく・清潔・快適にリニューアルし、子どもたちがすすんでいきたくなる「さわやかトイレ」に改修したいと思います。

本市の学校トイレに関するアンケート調査において、8割を超える児童生徒が学校のトイレに対して、臭い・汚い・暗いというマイナスイメージを抱いています。

学校トイレの現状としてはトイレ全体の7割が和式便器となっており、現代の生活環境から大きくかけ離れた状況となっています。学校トイレの改修は、これまで校舎の大規模改造に併せて実施してまいりましたが、依然として、昭和45年以前に建設された校舎を中心に3,000箇所のトイレが未改修となっています。

そこで、こうしたマイナスイメージや抵抗感をなくすため、トイレ全体を丸ごとリニューアルすることによって、「さわやかトイレ」に変身させます。

学校トイレは、子どもたちの健全な生活習慣と健康に深く関わるものです。実際に改修により、大切に使いたい、においがなくなったなどの子どもたちの声を聞きます。「学校トイレさわやか改修」を計画的に強く推し進め、明るく・清潔・快適で、使いやすいトイレを目指していきたいと思っております。

〈下田教育長〉

先ほど大島さんも言っていたので非常にありがたいんですけども、私どもは6人で名古屋市教育振興基本計画をつくる時に小学校、中学校、高校

を回りまして、子どもたちの意見を聞いたんですけれども、かなり多くの子どもたちがやっぱり学校のトイレが汚いということを訴えられました。そのときに何とかしますわって言ったんですけれども、なかなか厳しい。お金がかかる話だもんですから。ここは市長の応援をいただきたいなという風に思います。

それから、もう一度ビデオを見ていただきたいんですけれども、最後にですね、「学校生活アンケート、ハイパーQ Uの充実」についてお願いをしたいと思います。

子どもたちの状況や子どもの様子を知るための児童生徒の理解方法は、大きく、観察法と面接法と調査法の3つがあります。そのうちの調査法、これを進化させたものが「ハイパーQ U」です。

「ハイパーQ U」は、標準化された心理テストであり、多角的な分析により、結果を「見える化」して、誰にでもわかりやすく表します。

そうしたことによりまして、観察や面接法だけでは把握しづらい心理面を客観的に把握できて、いじめや不登校の早期発見、未然防止に役立っています。いわば、こころの健康診断、血液検査のようなものと言えます。

このように、診断結果は多くの帳票で多角的に表されます。

「ハイパーQ U」は、情報共有のツールでもあります。教員による支援はもちろんのこと「なごや子ども応援委員会」が支援の方法を検討したり、保護者から相談を受けたり、教員と連携したりするときにも、情報共有のツールとして、大変役立ちます。複数の大人が関わるときに有効な手立てとなりますし、専門的な意見あるいはアドバイスが分かりやすいという形で、保護者の方々も安心ができるというものでございます。

これが「ハイパーQ U」の分析結果の一つ、学級満足度のグラフです。縦軸が、自分が級友から受け入れられて、大切にされていると感じているかどうかの尺度です。横軸が、トラブルやいじめなどの不安がなく生活ができているかどうかの尺度を表しています。

それでは「ハイパーQ U」の効果について一つの例で説明します。例えば、赤い星の「要支援群」の子どもは、いじめを受けていたり不登校になったりする可能性が高い子どもといえます。早急に個別の面談をして、声かけや友達関係の改善など具体的な対応を計画的に行うことにより、学校生活に満足な状況

に変えることができます。

青い星の子どもは、「非承認群」と言いまして、クラスで認められることが少なく、いろんな活動の意欲が低い子どもといえます。このような子どもには友達から認められるような場面を工夫して作る必要があります。

緑の星の子どもは、自己中心的な面がありまして、トラブルが多いとされる「侵害行為認知群」に属しています。この場合は、働きかけが不十分だったということで、「学校生活満足群」に移りきれませんでした。しかしながら、この2回目の結果を見てその子どもへの支援を見直す手がかりとなります。

このように、「ハイパーQU」の効果は、1回目に発見の効果、2回目に改善の効果を得ることができ、これらの結果をもとに個別の支援やクラスでの全体指導を行う。こういうことで、居心地のよい、やる気のあるクラスを作ることができると思います。こういう意味で「ハイパーQU」は、1年に2回実施できるということが大変有効です。

現在は年1回の予算をいただいております、少し高いというご批判もあったもんですから、経費削減のために、昨年価格交渉もいたしまして、1割くらい負けてもらいました。それから今年は学年も少し絞った形にいたしました。これから本当に有効的に活用していこうと思うと、今後は、年2回実施ということ強く市長に求めたいと思います。

最後に、子ども応援委員会の取材ビデオがありますので、ぜひご覧ください。

〈取材ビデオ〉

昨年度、子ども応援委員会のスクールカウンセラーとして、学校生活アンケートに基づき、学級集団の様子や子どもについて、検討する機会をもちました。そのとき学校生活アンケートのような客観的な指標を用いて、先生方と情報共有でき、とても有意義だと感じました。これから私たち応援委員会が活動するに当たって、とても役立つものだと思っております。

質問内容も非常に簡単な言葉で書いてありましたから、子どもたちも非常に答えやすかったと思います。また、コミュニケーションスキルも高めることができたので、非常にいいアンケートだと私は思いました。

〈下田教育長〉

はい、ありがとうございました。

〈服部委員長〉

各委員の皆さん、ありがとうございました。

以上、名古屋市教育振興基本計画に定める重点施策と各委員の意見でございます。私ども教育委員会といたしましては、ただいま説明した重点施策を始めといたしまして、名古屋市教育振興基本計画の重点的な取組もきちっと進めていくことがとても大切だなという風に思っております。市長さんにもぜひ応援していただきたいなという風に思っておりますが、いかがでしょうか。

〈矢野MC〉

それでは、市長、スライド終わりましたので、戻っていただいて。

〈河村市長〉

それではわしがとりあえず言うのか。でだしを。

ごくろうさんでございました。ありがとうございました。

国が教育何とか法というのがありまして、それに基づいて、国が定めると言いますけれども、だいたいアメリカだと文部省がありませんからね、そもそも。連絡所みたいなものありますけど。それに基づいて自治体が定める、ということになっておりまして、実はそれほどまでに教育の自立性というのが大変に重要な課題だということではあるんです。

今見とったところによりますと、一つ私が思うのはやっぱり非常にデジタル的などこの人間ありますけど、教育の、後で出てきますけど、E d u c a t i o nということなんだけど、担任の先生の力量というのがどえりゃあでかいんですわな。

わたらの思い出を振り返ると、まあ、66になつとりますけど、校長さんとはほとんどしゃべったこともないで訳分からんですけど、担任の教師が魅力のある人間力をもつとるかどうかがというのがさうとう決定的ですね。そこらへんのところをなんとかしてもらわないかん、教育に。

〈下田教育長〉

研修を実施しております。

〈河村市長〉

研修ばかりしとつてもよ、そんなもんで簡単にできるもんじゃない。それはそれでやってもらってええけども。

人間力ですわな、やっぱり。人を愛する力とかですね、人のええ所を見抜く力とか、それから、勇気ですね。自分はえらいさまに怒られても、この子はこうやったらいいかなと、人はやっとりゃせんけど、これはこうしようかという。

そういうところが大事で、いるのではないかというか、ちょっと抜けてりゃせんか、という感じが、経験からするとしますけどね、僕は。

あとは話の中で、歴史の里の話にありましたが、あれはなかなか面白いことですけど、そうなりますとあそこは、神話の話が出てきましてですね、宮簀媛（みやずひめ）っていう。熱田神宮でですね、日本武尊（やまとたける）の最後の彼女がこの宮簀媛っていうんですけど。そういった話になってきますと神話のある程度教えるということでございますので、そのへんをまあ別に思想的ではなくて、実際に神話というものはあるものですから、そのへんも踏み込んでやらないと。単なる物理的な何か行って、古墳を見に行っただけでは意味がありませんからね。そういうふうに思いました。

それから、応援拠点。あれどのくらいあるの。まだ作ってないだろ？

〈福谷委員〉

まだありません。

〈河村市長〉

これからね、これから。

ということでございまして、大変なこれは課題で。こないだ名市大の関係の人としゃべっておったら、子ども応援委員会のことを。そんな小中学校ばかりやなしに大学も大変な問題だと、実は。やっぱり、いろんな悩みの学生がも

のすごいおるんだと。だでこっちも広げてもらえんかという人がいましたね。それは普通の企業でも、大変なんですよ。名古屋市役所が結構大変でしょ、多いでしょ？市役所が呼べば良いんじゃないか、専門の人を。

〈下田教育長〉

産業医がいます。

〈河村市長〉

産業医おる？あんまりそういう認識もないんですけれども。

グローバル化で英語につきましては、こんなもん何年今まで勉強をやってきたんかと。全然しゃべれえせん。

〈小栗委員〉

そうですね。

〈河村市長〉

なんなんだろう、これは。

〈小栗委員〉

やっぱり文法から入ったり。あと勇気がいるんですね、市長がおっしゃったように。恥ずかしいっていうのですね。できなかつたらなんか馬鹿にされるんじゃないかとかそういったところをなんかこう跳ね返せるような強い心が持てるようになるといいなと思うんですね。恥ずかしくないですよ、出来なくても。

〈河村市長〉

そんなもん、別に日本人だもんで、英語しゃべるのに多少ドジるのは当たり前のことですよ。ただ、アメリカ人のガキンチョがしゃべる英語は上手いなあと思いますよ。当たり前のことか。

〈小栗委員〉

そうですね。

〈河村市長〉

アメリカ人は英語が上手いなといつも思いますけど。私もかねがね言っとるけど、名古屋のいわゆる市立高校、名古屋市立高等学校においては英語の試験をやめた方がええと思いますよ、私。ないものすごく簡単にする。

試験があるもんで受験勉強、そうすると勉強せんといいますけど、それはもう今ないですね。誰が考えたって英語を自由にしゃべって色んな人・国の人と、たとえばアメリカ人とグローバルイングリッシュですわな、ええと思いますので。

僕は名古屋市立高校の英語の試験はなくす、あるいはたいへん簡単にしてそれだけで差がつかないという風にした方がいいと思う、僕は。

〈小栗委員〉

さすが市長大胆ですね。

〈下田教育長〉

今これ、何回か市長に言われてるんですけど、分かりづらくて。

〈河村市長〉

何が分からないんだ。英語でしゃべっとるんじゃないんだで。

〈下田教育長〉

でも、今高校の入試の英語も、だいたい会話といったことを中心の英語のテストになってますね。

〈河村市長〉

いや、テストやられるでしょ。こないだ某集会で、教育者の、高校入試だと
思いますけれど、会話のディクテーションといいますかヒアリングの試験の問
題をやったんですよ、そこで。そしたら何分かアメリカ人がしゃべるとる、英
語でしゃべるとるその要点を書けという、あんなもん分かるわけないがやって
言ったんだです。そうとう難しいんです。

だからそれをやるためには受験英語になる。どうやってやったらああいう高
校のヒアリング試験に受かるか、となっちゃうので。

そんなことより、朝起きてから「good morning」ということから
ですね、そういうことでわーっといくと。「I love you」でもな
んでもええですけど。そういう本当の日常のコミュニケーションイングリッ
シュ、そこをやらないと、いつまでたっても、もったいないと思いますね、何年
間も、という感じがしております。

それから、あと、グローバル化の中で大きいのは、やっぱりね、外国人のも
っとる自分の意見を言うという力ね。あれは素晴らしいですね。ちゃんと手あ
げるし、自分で。いいますからね。「I have suggestion」
ってやりますわね。それは、後で言いますが、3分間スピーチと同じなんだ
けど、こないだ討論会行ってきましたけど、初めて。長良中学じゃない、南区
か。

〈下田教育長〉

熱田区、日比野中学。

〈河村市長〉

熱田区か。日比野中学で。ようやく、6年ぶりに始まりまして。そしたら、
そのテーマが「オセアニアにおける移民政策について述べなさい」ってやつだ
もんで。ちょっと待ってくれって言って、そんな難しいの。そりゃ、オースト
ラリアがね、移民国家でどうやって発達していったかっていうことは、大変な
テーマですけども。これはもう、もっと自由にしゃべらせないかんがやという
ことで、これは相談してやとりまして。それは、そういうテーマ別でもいい
んだけど。もう一個は、自由にしゃべらせる、ただし、僕がいつとるのは、た

たとえば原発に賛成か反対かと、集団的自衛権でもいいですよ、沖縄の基地をどう思うと、いうことも言わせないかんですよ、これは。その代わり、先生は、僕の提案とするとね、テーマだけ出してもらって、生徒が、これ賛成だとか反対だと言ったら、やっぱり賛成だいう人にはこういう反対意見もあるよと、いうことで、やっぱり社会と言うものは、いろいろ多様性があるから、両面から考えなさいよ、ということをやちゃんとさえ、それでいいんだと。たぶん僕はそれが怖いので、ようやらんのではないかと。自由討論。

でもやっぱり子どもにとってすると、オセアニアの移民政策だ、言われてもね、わざとらしくなるんですわ。やっぱり多くの子どもは原稿読んどったです。だから原稿なしで3分間。

これはロサンゼルスではね、実施できてたんですけど、ロサンゼルスで記者会見やったときに、外国人が、わが国では、3分って言ったか5分って言ったかちょっと覚えありませんけど、ノー原稿で、ちゃんとみんなの前で、私はこう考える、っていうのがあるよ言いましたんで。ぜひこのグローバル化の基本的な要素としてですね、英語でしゃべれるなら英語でしゃべって「I think」ってちゃんとと言えるように、これ出来るとええなあと。

ということでございまして。これは、学力向上問題と同じですが、先ほど野田先生も言われたように確かにしゃべるのもだけども、何を考えとるのかを考える能力も大事だね、確かに。そういう文明がそもそもあまりないんじゃないの。表現の前に自分の意見を一応それなりに固めないかん。そういうことを受験勉強以外に社会の問題、自分でこれはこうだなという風に意見を構成するというトレーニングが要りますね、これね。あまり硬くならないように、両側の意見を聞こうとするということが子どもには必要なのかなという。

それから、タブレットの予算は、お伺いいたしました。

トイレにつきましては、先ほど菊里の女の子も言っておりましたが、これもやりましょうよ、はよ。あれでいいんじゃないですか、ウォシュレットとか、どうせやるんだったら。けちとったってしょうがないと思いますよ、私は。

考えてみると小中学校の便所は、たまに行きますけど、僕らの頃と同じだねまったく。いま66ですから、55年から60年間同じということですよ。世

界遺産になるかどうか知りませんが。

～（笑い）～

世界遺産にしてもしょうがないですから、早くやりましょう。

ハイパーQUの話がありましたが、どういうことかよく分からないだろうけども知能テストみたいなやつですわ。

〈下田教育長〉

人間関係を示しています。

〈河村市長〉

知能テストの人間関係版みたいなやつ。

私は小さいときに知能テストをやらされたでしょう。あれのデータはどうなったんだ？学校がもってってどっか隠しとりやせんか。あれ。

〈下田教育長〉

廃棄してる。

〈河村市長〉

廃棄しとるんか、ほんとうに。大変怪しい話でございまして、どこにいったかよう分からない、国会時代にようけ調べましたけども。とんでもないな、いうことがありましたので。ここは非常に大事にしてもらわないかん。

しかし、くそみたいに高いな、問題は。毎年8千万でしたか。

〈下田教育長〉

8千万。

〈河村市長〉

8千万。

〈下田教育長〉

18万人ですよ、相手が。18万人の子どもを対象にしています。

〈河村市長〉

18万人だと言いますが、8千万言うたらどういうもんですか。これ。

ぱっとみますと、うーん、ということで。このくらい、自分でちっとは考えやーと言っとるんですわ。せっかく子ども応援委員会やっていますので、日本でオンリーワンの。若干質問項目を違うことを入れてもいいと思うんですね。あなたは子ども応援委員会を知っていますかとか、入れられますしですね。応援委員の先生はどうか、とかフレンドリーですかどうかとかいうのもあるので。

何遍も言ったけど、担任の人間力というのは大きいよ。当たり前ですけど。

〈下田教育長〉

そう思いますけど、道具は道具で要りますよ。

〈河村市長〉

要るものは要る、と言うようなことは感じましたけど。

まあ予算の付けかたを見てもらっても分かるように、子ども応援委員会は一番シンボルですけど、ナゴヤは、圧倒的にこれ、日本一子どもを応援するマチということで、今日は、マスコミの方がお見えになると思うけど、全国ニュースで取り上げてもらわないかん。放送を一遍やりましたけど、まあダントツ進んどると思いますよ。後で僕のテーマのときにも出てきますけど。私ばかりしゃべっていかんですけど。

要は、明治維新から言ってもいいんですけど、太平洋戦争で負けたという大きなとんでもない不幸を、経験したんですね。特に名古屋の経験した不幸はすごいですよ、名古屋の空襲というのは。そういう中で貧しかったわけだ、お互いに。ものすごく。そういう中どうしても右へならえ形の復興をせざるを得なかったというところは事実だと思いますね。そういう中で、今度は、いよいよ

右へならえにならなくてもいいぞ言って。自分の言いたいことを言ってこいと。先生は、なんだって言ってみよと。そういう時代にそろそろ入ってきたんではないか。その一番の先駆けをするということで、後で私の大綱というか、今年66になるもので、ある程度言ってもいいと思うけども、考え方というのは。

やっぱり今まで言ってきたそういう考えというのは、何遍も言っていますけども、教育という言葉はですね、これは国会議員時代に気づきまして、もう一つあるのが、自由とリバティの関係ですけど、日本語と英語は違うのではないかということに、国会議員時代にどうも気づきましてですね。今日始めての方も何遍も聞いてうるさいという人がおるかもしれませんが、教育の教の漢字の右側の文みたいななあれは、ムチの象形文字なんですね。ムチで右側のこういうやつ、教のこっち側（左側）は入れ物、場所みたいなものなんですけど、右側はムチです。ムチでしばいて、ちゃんとお前ら言うことを聞けと一つの儒教的精神があるんです。この言葉に。

E d u c a t i o nとは、ご存知のように、ラテン語でeは外へ、d u c eというのは引っ張るという意味です。だからp r o d u c eというのは、p r oは前へ、引っ張るから生産になる。E d u c a t i o nのe d u c eには、ムチの意味は全くないんです。

色んな子どもさんの可能性、金のある子ない子、親が二人おる子、そうでない子、体が不自由な子、元気におられる子色んな子どもがおるんだけども、それぞれに中にええところもあるんです。光輝くところが。内在するものを、それを引っ張り出してあげる、応援するというのがE d u c a t i o nという意味なんですね、これ。

〈矢野MC〉

市長、大変今日は市長たのもしく見えます。色んな意見を聞かせていただいておりますけど、議題③に行かしていただいでですね。

〈河村市長〉

ちょっと待って大事なことで・・・

〈矢野MC〉

今その、E d u c a t i o nを、スクリーンでやりましょうよ。

〈河村市長〉

そしたら、議題②のほうは、今のお話で、承認するやつではないんだな、ご報告を頂戴することになりますけど、そういうことでよろしいでしょうか。

ご報告頂戴いたしました。応援するというところで、私も応援しますが、市民の皆さんでぜひ応援してください。

〈河村市長〉

議題③というのがあります、市長の定める教育に関する大綱ということでございまして、次に、『議題③ 市長の定める教育に関する大綱について』でございまして。

これは、名古屋市長が定める教育に関する施策の大方針・目標となるものでございまして、趣旨を説明します。私がこれ裏を見ながらやるんですかね。ようわかりませんが、読んだ方がいいですよ。

〈矢野MC〉

はい、これは一番最初に市長がお話をしていただいて。

〈市長〉

はいはい、これ書いてまして。ちなみにこれにつきましては、皆さんと相談しまして、私は自分の言葉で、せつかく法律ができたものですから、ある意味では政治的責任をとるということで、教育委員の方やら、そちらの教育委員会の事務局と相談して作ったものでございます。

まず、題目ですけど、名称は「ナゴヤ子ども応援大綱 ～ 日本で1番子どもを応援するマチ ナゴヤ～」と。

まあ「ナゴヤ」はグローバル人材と言うくらいで、最近僕はカタカナで、よく使っています。なんとなくこれで世界の、という雰囲気があるでしょ。

まず、「教育」を「E d u c a t i o n」へ！」と

教の文字の右側のこれ文というようなやつですね、これね、これにはムチの意味が入っているといわれている。子どもを型にはめるのではなく、Education、eというのは外へ、duceというのは引っぱること、の精神のもとで、教え込む授業ではなく、子どもが考え、自ら学ぶ授業を推し進め、子どもたちに内在する生きる力を引き出し、人生を応援します、というまあ私これ、自分の人生そのものみたいな、申し訳ないですけど。

今いいましたけど、教え込むじゃなく、やっぱりこれいろんな可能性があるという、子どもの中に、子どもじゃなくても人間大体そうなんだけど、持つとる光をですね、とりだす、それが中心で無いといけない、ということでございます。教え込む授業ではなく、子どもが考え、自ら学ぶ授業を推し進める。

ということでございます。

それから、これ2番目、「「なごやっ子」の育ちと針路を応援する仕組みを確立!」、このシン路については、いわゆる「進む」という字でなくて「針」という字をいつも使っております。

進む、というと「大学受験どこいくの?高校どこいくの?」ということですけど、針というのは、「大きくなったら何になるの?」ということです。

常勤のスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、スクールアドバイザーとスクールポリス、現在はこのスクールポリスは非常勤、からなる4職種のチームで子どもを応援する日本初の仕組み「なごや子ども応援委員会」を確立して、悩みを解決し、目先の、目の前の進路にとどまらない「大きくなったら何になるの?」という将来の針路を応援いたします。

また、貧困問題に起因して深刻化する子どもの問題に正面から全庁的に取り組みます。

ということでございまして、まあ「大きくなったら何になるの?」という、「What would you do in your future?」これはですね、動機として子どもに投げかけられるのは、いろんな意味でええというのは、私あれ、教育心理学で読んだことがあります。まあそんなことを子ども応援委員会にも期待しております。

ちなみに、アメリカで学んだこと言うと、気づいた話の中では、アメリカの教育ではスクールカウンセラーというのは、実はエリートを発掘するというの

を大事にしてるんだと。スプートニク・ショックというのがありまして、人工衛星は、ソ連のが勝っちゃったわけです、アメリカに。だからアメリカが焦りましてですね。家貧しくして孝子出づ、と貧しい家の子でもノーベル賞をとれるような子が出てくる。発見せないかんと、いうのに非常に力を入れて、むしろそちらの動機が一時は大変強かったと、いう風に聞いております。

3番目、「歴史や文化を大切にすることを育み、世界にはばたく力を育成!」、ということで、日本・ナゴヤの歴史や文化の魅力に誇りを持ち、自らのアイデンティティを形づくる地域や家族などを大切にし、自分の考えを持ち、ここからだね、人前で堂々と話せる、グローバル社会で活躍できる人材を育成します。これですわ、やっぱり、これが大事だね。これがね、やっぱり非常にね。

わしが覚えているのは、レクリエーションは森林公園がええか緑地公園に行くのがええか、これ手あげてしゃべったことあるんですよ。中学校のときに、確か。まあ、こういうのもええですけど、もう一つ社会的なものにコミットして、そこで先生がとめんように、そこで社会的なものができると、PTAから何かおそがいわけですわ。だで、そこはきちんと皆さんお考えになっていただいて、その代わり、両方の意見は言ったってほしいんですわ。あんた賛成だ言うけどこういう反対意見もあるよと。両方ちゃんと頭に入れて考えようね、と。そういう風になれば素晴らしいのではないかと。

最後、「名古屋市教育振興基本計画の重点的取組事項を力強く推進!」、
「グローバル人材育成教育の推進」、「子ども・教育に関する総合的な相談施設の整備」、「歴史の里の整備」など重点施策の着実な推進を図り、特に「学校トイレさわやか改修」については、力強く進めます、というのが、当局の非常に強いご要望でございます。

ま、これは先ほど発表されたことを皆で応援していきますよということでございます。

ということでございますが、委員の皆さんご意見は、どんなものでございませうでしょうか。

〈下田教育長〉

はい、あの一番最初のところなんですけど、いつもおっしゃられる、教育の教

のムチというまあ、他の説もありまして、特にムチという意味をこめていない、という説もあるもんですから、ここの所をとっていただいたほうがいいかな、とう気はするんですけど。

〈河村市長〉

いや、それはね、ムチでないという説は、ごく少数説でございまして。これは変えていかないかん、時代的に。だで、ええ名前は、応援委員会にするか、それともエデュケーション委員会、まあテレビジョンとか英語何でも使いますんで、にするか、ということございまして。この物事変えるときは、根本的なところから変えないと、どんだけ上栄えをコチョコチョココチョコとやっつっても変わりませんよ。言っときますけど。

もひとつ問題、あんまり言うとも長なるけど自由というやつ、あれおのが守るものでしょ。フリーダムとかリバティ、あれ誤訳だと言われています。リバティでもフリーダムでも何かの既得権から解放するというやつなんです。おのが守っても関係ないんです。

だで、日本において自由はどーも上手く広がらない。自分勝手ととられてしまう。いうことがありまして

同じようなことで、僕はこの教育というのに、やっぱり上から目線的なね、そりゃ学校の先生つらいと思いますよ。でもこれはしょうがないんですよ。別に個人が悪いわけじゃなくて、時代の大きな流れだと思いますので。こういう、応援するんだと。

まあもう一つ今日言いますと、今日西区で、重度の心身障害者の皆さんの施設がありまして。あれティンクルというんですね。ティンクルなごや。あれどういうことかと言いますと、ティンクルというので「Twinkle, Twinkle, little star. How I wonder what you are ♪」っていうやつ。あの歌でティンクルって光るっていう意味。ティンクルあれ何かといいましたら、たまたまの偶然によって、ベッドの上に寝たきりになっているけれど、その人の中に光り輝くものがあるんだと、ティンクルしてるんだと。それをみんなで応援したらんと意味が無いんです。そういうことで使ってることはぜんぜん問題ないんですよ。内在するものを引っ張

り出すということで。

僕はナゴヤの子どもさんたちを「おう立派になれよと、みんな。」という精神を込めるのに、教育をね、立派になれよと言うのはちょっと、なんかなんとなくいかんですね、根本を変えないと、という気がします。

〈野田委員〉

この例のムチという字ですね、私の名前に2つムチがついております。

～（笑い）～

まあ打たれっぱなしなんですけども、私この名前好きなんですけども、市長の言われる、その引き出してっていうのは分かりますし、それから教え込む授業ではなくて、子どもが自ら考える授業、これはもう平成になってから、当然のことで、一個前の指導要領の改訂で、考えさせる授業ってキーワードになりました。教える部分是一緒なんですよ。考えさせるためには何を教えたらいいか、いわゆる引き出す授業を展開するということなんですけども、まあ、そこは確認するという意味でいいと思いますけど。

たとえば赤いところみていただけます、市長さん。赤いところですね。たとえば2つ目3つ目4つ目、仕組みを確立、はばたく力を育成、力強く推進、いいですね。1番上だけね、ちょっと異質なんです。

～（笑い）～

で、たとえばですね。子どもたちに内在する生きる力を引き出し、人生を応援、っていう風にポンと持っていけば他と合うんですよ。

〈河村市長〉

まあ、この問題については、ネットで見ただけであれば、僕が言っただけじゃなくて、歴史的な論争なんです、これ、実は。教育とエデュケーションが違うのではないかと。あのこれグーグル見ただけであれば、教育とエデュケー

ションと入れればできますこれ。どうも明治時代からあるのかどうか分かりませんが、そういうことがもうありまして、私はこれインシスト（主張）しますので、いかんだったら、これ決めるの保留にした方がいいと思います。それから簡単に自分の理念を外す訳にはいきません。こら私のマニフェストに書いてありますので。だからあの根本的なところの議論をナゴヤの皆さんに呼びかけたと言う風にした方が、これはアメリカでいうグローバル人材ですわ。その方が。それいいですよ。そんなことは私、恥でもなんでもありませんから。ちゃんと自分が思ったことを皆さんに呼びかけて、皆さんでご議論いただくと。自分でこうだと言ったことをそう簡単には変えませんよ。マニフェストにも書いてあるから。

〈矢野MC〉

さあ服部委員長、どういたしましょう。もうこれ大綱に署名もしていただくわけなんですけども、さてここはどうするか。

〈服部委員長〉

エデュケーションということは、子どもの可能性を引き出すという、そういう発想とか、子どもを応援していく視点は全く私どもも同じだと思うんですね。そういうところでは市長に異議申し上げているわけではないとは思いますが。

市長さんがこの大綱に込められたメッセージというものは、私ども教育委員会にとっても、生きるわけなんですけども、言い方とかその辺のところ、どうですか。これでよろしいですか。

〈各委員〉

（うなずく）

〈服部委員長〉

結構ですか。その辺、よろしいですよ。

市長さんがこの大綱に込められたメッセージと言うところはわたくしども、しっかり受けまして、教育委員会としても、強力な支援・バックアップをいた

だいたと感じております。

この大綱は大切にしながらですね、その方針の実現をしていくってことになりますと、先ほど私ども説明させていただきました名古屋市教育振興基本計画を着実に推進してくってということが、まず大事かなという風に思いますので。市長さんにも引き続きご支援いただきたいという風に思います。

〈河村市長〉

3分間スピーチなんかでもそうだけでも、やっぱり見とって、僕は別にアメリカの奴隷でもなんでもないですよ、でもええとこは学ばないかん。これみんな洋服着とるじゃないですか。和服着とる人だれもおらんわけでしょ。西洋文化でええと思えばのらないかん、学ばないかん。

やっぱり向こう見とるとね、授業なんかでもどっちか言うとな、生徒がやるところがありますよね。先生がここにおってですね。アドバイザー、どちらか言うと。生徒は自分でいろいろ手上げて言っとる。

たぶん先生からすると「河村さんそんなカッコいいこと言ってよ、授業の中でどかどか騒いどる子おったらどうするんだ。お前、そりゃ怒ったらないかんだろ。」こうなると思いまして、そりゃ怒ったることも必要だと思いますけど、たぶんそういうときでも、怒るのも大事だけど、アメリカ流かどうか知りませんが、その子に前に出てきてもらって、「あなたはなぜ、そういうことをするの」と自分で1分なり2分なり、自分の意見言ってみやあと、「先生の授業が面白くないからとか、いろんなこといいですよ。」というやどっちかいとそういうチャンスを与えると。そういう型のものに変わってかんかとナゴヤの子どもたちが。そういう風に、ぜひね、でかいですから、教育と言うのは、エデュケーション言うのは。

〈服部委員長〉

先ほど市長さん、子ども応援委員会のこともずいぶん応援していただいていると思いますけど、やっぱりその子どもにカウンセリングするっていうときは、やっぱりじっくりと、その子どもの意見を聴きながら、自分の意見を言える力を育てていくってということでもありますので。

〈市長〉

自分がね。

〈服部委員長〉

はい。そういう意味では、全面的に授業の中で出来ないときは、個々のお子さんとじっくり出来るかと思imasuので、先生方とスクールカウンセラーさんと協力してやるとか、そういう場合の具体的なことがやってけるんじゃないかなという風に思imasu。

〈河村市長〉

はっきり言imasuとね、子ども応援委員会って先生の分業とも言えるんですよ。わかりやすく言うと。これ、何でこれに気づかなかったのかと。66歳になりますけど。議員もものすごい長いですけど。マスコミもだれも言わないですよ。先生の分業。そういうところにどうもね、何かやっぱり教育というものがとらわれとらせんかと。という風にどーも感じるんですよ。

〈矢野MC〉

それでは市長、署名をしていただきたいですけれども。これでいいかどうかも。

〈河村市長〉

もし、なんだったら飛ばしてもいいですよ。でも取り下げませんよ、私は。ええ。

〈服部委員長〉

これで署名をお願いしたいと思います。

〈河村市長〉

(署名する。)

〈矢野MC〉

はい。署名をしていただきました。ということで、これですね。総合教育会議としては、以上で終了となりますけど。ただいま策定されました大綱の下、ナゴヤの教育をこの教育振興基本計画とともに、着実に実行していただきたいというふうに思いますが、市長とそれから服部委員長、そして皆さんもどうぞお席お立ちいただきまして、皆さんのほうに、今日は傍聴いただいています皆さんにお示しをいただければと思います。

そして、記者の皆さんは、これでお写真を取っていただければと。よろしいでしょうか。ナゴヤ子ども応援大綱 日本で1番子どもを応援するマチ ナゴヤです。

皆さんありがとうございました。

傍聴者感想

〈市民1〉

どうもありがとうございました。

公開されたことは、本当に素晴らしいことです。ただ私、早めに来てこの位置に座らせてもらいましたが、日本で1番子どもを応援すると目に入ってきました、ん？と思いました。日本で1番ですね、中学3年生が、高校に進学できないマチなんです。県でもそうです。全国一の高校進学率の低い政令市です。ま、京都に負けるときもあります、愛知県としても神奈川とどっこいどっこい。だから1番応援するんだったら、2番目の針の針路もさることながら、目の進む路ですね、目の進む路にとどまらず、と書かれていますよね、目前で泣いているんですよ。このことをどうお考えなのかなという風に思いました。ま、他の方もいろいろ意見おありだと思いますので、あるいは感想ですね。まだあるんですが、1件だけでとどめますが、ぜひ教育委員の皆様、それから市長さん、これは名古屋市だけで解決は出来ません。愛知県教委が関わってきます。えー来週1週間後かな、いや今週ですね開かれます入選協とかですね、様々な会議ありますので、そういうところですね、ぜひ名古屋市もそういう声をあげていただきたい。ま、事務局の方が行かれますけども。はい。感想、びっくりしました。本気なのか、という感じです。

〈矢野MC〉

ありがとうございます。これは、お聞きしたということだけでよろしいでしょうか。ご質問ということじゃなく。

〈市民1〉

これは、河村さんじゃありませんが、徹底的にやらなきゃ意味が無いんです。今のこの状態がですね、30年くらい続いています。30年ですよ、3分の1世紀ですよ。

〈矢野MC〉

わかりました。まずはお聞きしたということで。ありがとうございました。

〈河村市長〉

高校進学率がそんなに低いゆうことになると、それはやっぱり大問題ですので、それはそれで一遍もう一回きちんとレビューして取組まないといかんと思いますよ。

〈矢野MC〉

という答えをいただきました。よろしいですか。ありがとうございます。

〈市民2〉

今日はですね。このナゴヤ子ども応援会議の方、傍聴させていただきまして本当にありがとうございました。どういう会議なのかなと思って傍聴させていただいたんですけども、まあ法律改正に伴ってこうやって皆に傍聴させようという初の試みだということで、とてもありがたいなと思いましたし、中身的にもですね、とてもこれから教育委員会が何をどういう風にしていくのか、子どもの教育をどういう風にしていくのか、ということを市長さん中心に、大変熱くいろいろ教わることが出来て、よかったなと思っています。

一番最初の、教育をE d u c a t i o nへという風で、ムチの意味があるとかいろいろ前にも聞いたことあるなあと思いながら拝聴しておりましたけども、まあ、あの、少なくとも自分の職場では、そういう意識の先生は、少ない、というかほとんどいないなど。本当にこないだの学習指導要領の改訂、その前の学習指導要領の改訂から、生きる力を育むってということで、本当に子どもたちが自分で学んでいけるようになっていうことを一生懸命考えて現場の先生は、働いているんだと思うんで、確かにムチをピシピシとする雰囲気先生も昔はいたかもしれませんが、今はそうでないので、市長さんがおっしゃることは、もうそういう方向性十分持って、やってるぞ、と自分は思いました。

で、とても気になっているのは、2年後の権限移譲で、名古屋市の先生は、

名古屋市職員となっていくと。今は県費、県費負担教職員ということで、県の方の財政で、学校運営していくんですけども、その県から市に権限移譲なったときに、子どもたちを応援するという意味で、本当に予算がしっかりと、いままでどおりより、日本で1番子どもを応援するマチなので、愛知県費負担教職員だったときよりも、子どもたちにしっかり教育が出来る、条件を整えていただけるんだらうか、っていうのがちょっと心配な気持ちでいます。あの、県費負担教職員だから先生の給料のことを言っているみたいですけど、そうではなくて、先生の数だとか、いろんな立場で子どもに関わる人たち、そういう部分をしっかり充実させていただかないと、子どもたちの応援が、学校現場で十分出来んのじゃないかなという風に不安に思っています。どうかその辺、感想ですが、受け止めていただいて、よろしくお願ひしたいと思っています。

〈矢野MC〉

ありがとうございました。

〈河村市長〉

そのことでちょっと思いますけど、子ども応援委員会でまあ、去年1年で2,600件の相談があるわけです。人数で言いますと525人だと思いますけどね。

たぶんこれ、まだ、今の状況でそうですから、各中学校に増やして、子ども応援委員会150人くらいになりますと、まあ一応、アメリカのテキストなんか読んどると、子ども600人に1人は最低いると、いう状況までなると思うんですね。そうすると、大体4倍となりますから、大体これで10,000件くらい年間、子どもの悩みの相談がくることになるんですかこれ。そういうときに、地域の皆さんで助け合っただけというのは大変ありがたいし、これ非常に重要だと思うんですけど、やっぱり根本変えた取り組みによってですね、これ先生の分業ですので、いまんとこそんなに1番多い数では教科の先生からの相談がやっぱりトップなんですわこれ。

だで、相当、変な言い方ですけど、皆さんの大変お忙しいところを、若干救えるかなあと、いう気持ちはあるんです。ただ反対に、あの数学の先生だった

ら数学の授業にちゃんとやってもらわないかんけど。一応子どもがあの子おかしいなと思ったら、そのことを応援委員会に振れますので、反対にまた、子どものことをもう一つちょっと見てもらえることがあるんかしらんと思ったりして。ま、そんなことでは、先生方の忙しさと言いますかね、そういうことにも若干、お手伝いできへんかと、いう気はしております。ええ。

まあ給料はなかなか上がらんとおもいますが、これは。今の世の中でございますので、と思いますが。そんなことで、相当教育のもっとるボリュームというか、中の質のボリュームは、ナゴヤ飛躍的に僕は発達してるかな、と発展していこうという気がしております。

そのために、こないだもちょっと記者会見で言ったけど、そのために必要な税金については、市民の皆さんの血税でうってますけど、これは惜しむことはありません。そういう気持ちでやっていきます。

〈矢野MC〉

ありがとうございました。よろしいでしょうか。ちなみ小中高どの先生でいらっしゃるんですか。

〈市民2〉

中学です。

〈矢野MC〉

中学。ありがとうございました。